

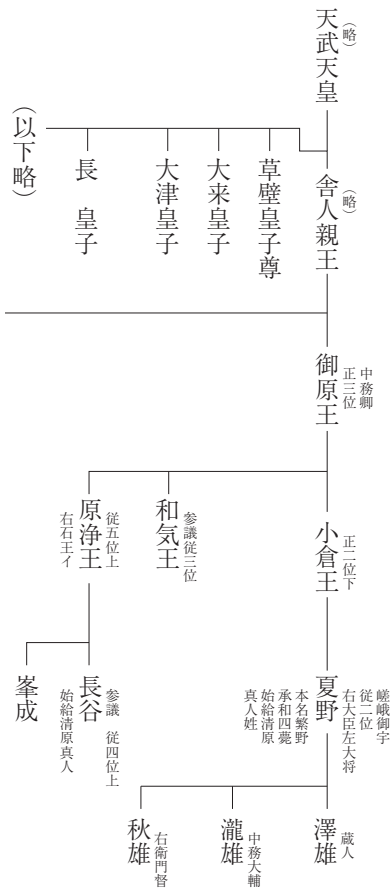
出羽清原氏と海道平氏（下）

佐々木 紀 一

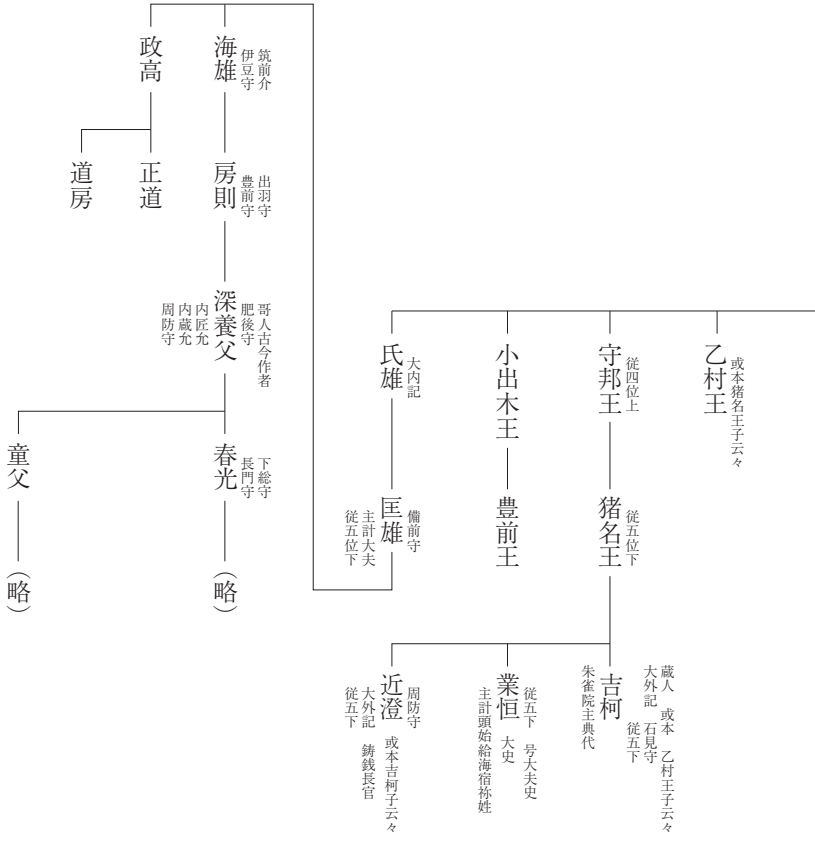
四、吉田本の成立―舍人親王王孫部の比較から

以上の諸本に増して、吉田本の成立は複雑である。冒頭のA・Bは独自で他本と異なる。A部の掲載人物は、以下の通り。

（吉田本）



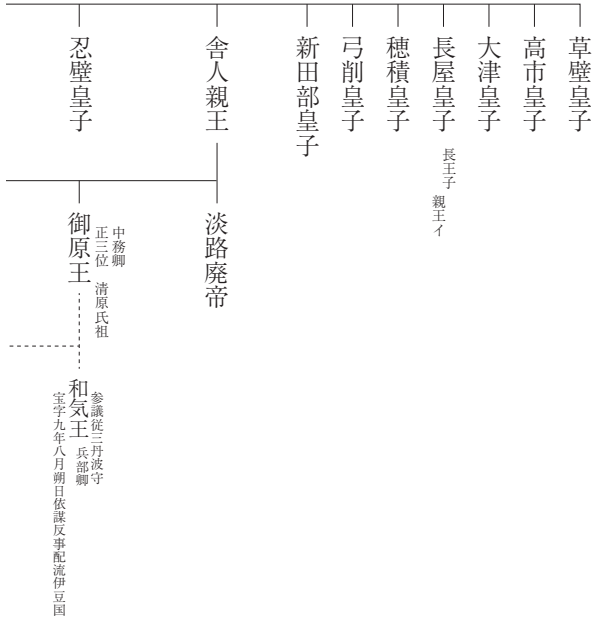
（以下略）



とあり、天武天皇を始祖とするから、仁和寺本・壬生丙本よりも後出である事になるが、傍系の天武皇孫を挙げる点と、頼隆に至る歴代は、他の清原氏系図と大きく異なる。

管見に入つた皇室系図でこの吉田本A部に近いのは『本朝皇胤紹運録』の増補本⁽¹⁾で、増補の痕跡が残る書陵部蔵、文明十六年(一四八四)写甘露寺親長本を挙げれば⁽²⁾、

(親長本)(関係部のみ摘記)



磯城皇子

守部王 從四位上 同

佃川王 賜國真人姓

小倉王 正五下
清原夏野 左大臣從二左大臣賜真人姓
本名繁野 母左馬頭小野治平女

皇川王

丹波王

石淨王 五位
長谷 參木右衛門督
承和元壽六十一

瀧雄 從四下

澤雄

秋雄 從五下
已上三人或
夏野子云々

船王

池王

出木井王

三浦王

三嶋王

式部王 從四上

猪名王 一說守部王子云々
无位

乙村王 无位
清原峯成 三木從四上
元美能王天長
十改清(一)

守部王 從四上

大湯座主 賜三嶋真人姓

出木井王_イ

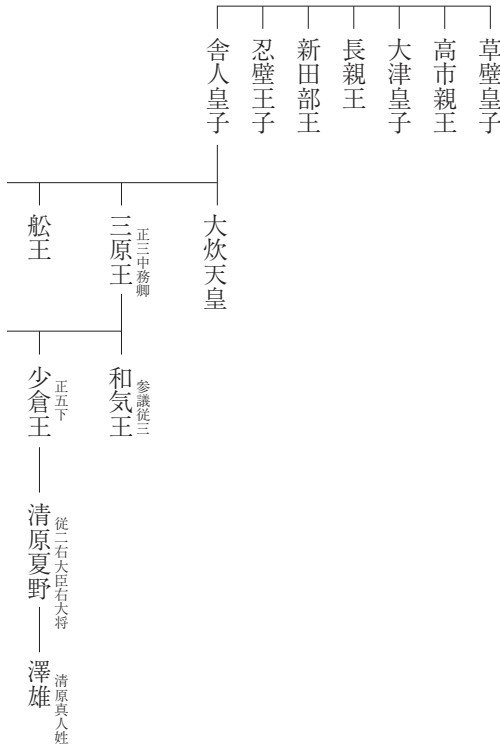
貞代王 大監物

有雄 從四下

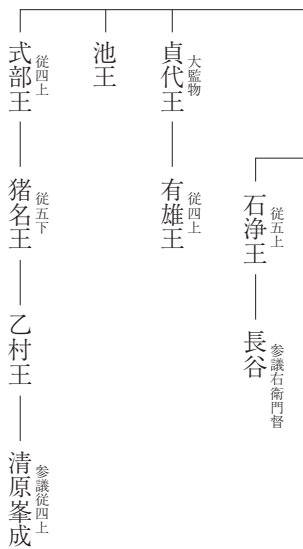
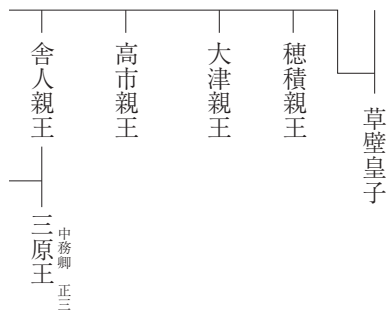
(略)

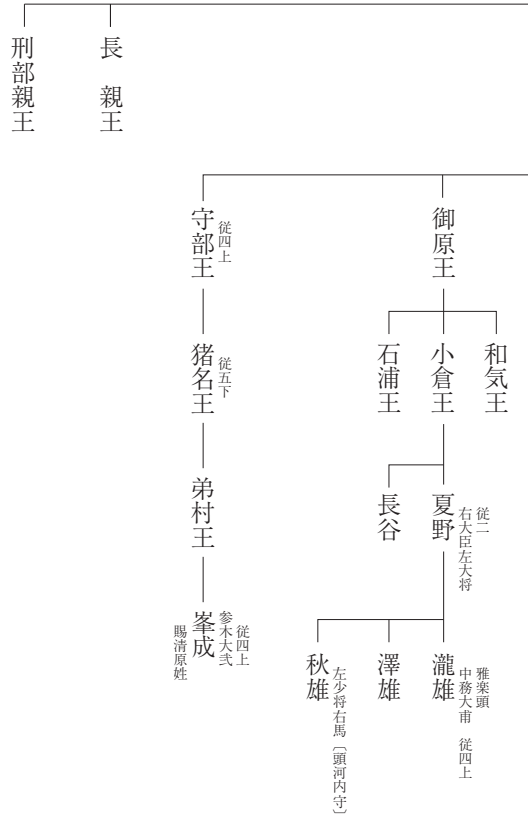
とあり、小字（破線）の増補部が吉田本に近似する所が多いのだが、相違点もあり、必ずしも増補本の『紹運録』よりの引用と決し難い。即ち吉田本で、滝雄三兄弟の父を夏野とする点、秋雄の官途の「右衛門督」が歴史的に正しいが、⁽³⁾『紹運録』は長谷をその父として異なる。また吉田本天武皇子の長皇子は、『紹運録』の長屋皇子の異説である。何れも吉田本が、『紹運録』の異説の方を採用した可能性を完全に否定出来ないが、瀧雄の「中務大輔」の官は歴史的に正しく、⁽⁴⁾『紹運録』には見えない。さうしてこの相違点の幾つかは『本朝帝系抄』⁽⁵⁾・書陵部蔵谷森本『大系図』十三所収の「高階系図」⁽⁶⁾が吉田本に一致する（以下、共に関係部のみ摘記）。

『本朝帝系抄』



(谷森本)「高階系図」





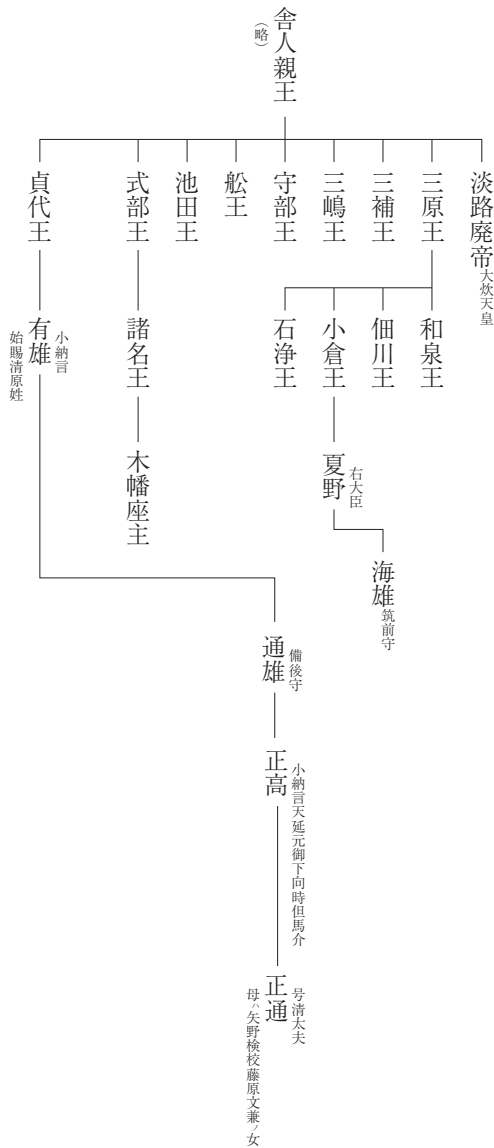
とある。一方で小出来王（吉田本）に相当する出来井王（親長本）が無い等、完全に一致しないから、何れも吉田本の典拠とは言い難い。

また豊後清原氏の系譜部（c二）は、匡雄の子・海雄の弟政（正）高より出るとするが、吉田本には、現在伝はる豊後清原氏の系図に、一部近い所がある。素より正高の豊後移住について、

豊之後州玖珠郡長野氏先出、自天武帝皇子一品舍人親王、舍人子曰貞代王、貞代王生有雄、累官至小納言、其子通雄始賜姓清原、通雄子小納言正高、蒙勅勘、任但馬亮、出守于豊後州玖珠郡、又賜油布院・日出莊・豊前国安心院・筑後国生葉・竹野五箇所、領之（豊後清原姓長野氏系図）⁽⁷⁾

とある経緯は信用できず、実在も確認出来ない。その系統も貞代王子の有雄、その子に通雄、その子に正高とする系譜も未確認であるが、

『古後文書』「古後系図」⁽⁸⁾



と、その舍人親王王子部を見るに、増補系の『紹運録』に近く、貞代王の子に通雄を釣る点では、諸道略本・壬生丙本（袖書）に一致する（本稿（上）掲載）。豊後清原氏系図の成立は措くとしても、吉田本が豊後清原氏系図に特に近似するとは言へないのだが、吉田本の「匡雄」は通（道）雄に相当すると考へられる。何故ならばその脇書に「主計大夫」とあるが、冷泉家時雨亭文庫蔵『歌人系図』に⁽⁹⁾

肥後守 通雅 — 海雄 — 主計大夫 通雄 — 肥後守 房則 — 肥後守 深養父 — 長門守 春元 — 肥後守 元輔

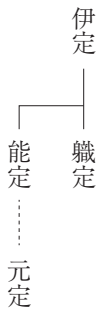
と同名同称の人物が見えるからで、『古今和歌集目録』『清原深養父』の「備後守道雄曾孫、筑前介海雄孫、豊前介房則男」⁽¹⁰⁾をも参照すると、吉田本の豊後清原氏と深養父流は、他の系図と一部共通する事になるのである。

また吉田本には他の系図に見えない豊前王が見える。同人は『三代実録』貞観七年二月二日条の、

従四位上行伊予守豊前王卒、豊前王者、贈一品舍人親王後四世、木工頭従五位上榮井王之子也
 に見え、舍人親王子孫であるが、吉田本の小出来王（『紹運録』『出来井王』）は榮井王の誤りと推定出来、代数は誤るものの、独自の記事を持つ誤である。

一方、吉田本は岑成・長谷を兄弟とするが、その世系は『紹運録』が正しく、吉田本ではその系統が分断されてゐる。⁽¹¹⁾ また吉柯・業恒・近澄を兄弟とする点、吉田本は独自で、本稿（上）掲載の『続古事談』第五「諸道」第一四話からすると誤りである。これは何より吉田本の後出の可能性を窺はせる点である。更に吉田本の性質を窺ふ上で、満定流が本系と切り離されて別掲され、それが諸道略本に一致してゐる事が注目される。即ち満隆を含む定隆流は両本ではほぼ一致するが、吉田本は本系部で、職頭まで掲載し、別に本系と離れて職頭父の職定よりの系譜を重複掲載するのである（脇書略、破線は中途省略）⁽¹²⁾

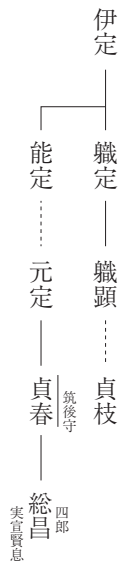
(吉田本本系)



(吉田本別掲部)



(諸道略本)



諸道略本はこの本系と別掲部の二つが一つになつてゐるが、吉田本がこれに基づいたとすると、改めて別掲とするのは不自然である。また同流の最終掲載人物は吉田本では評定衆の元定（文明十一年までの記事）までだが、諸道略本ではその孫の繪昌である事を見るに、諸道略本は吉田本よりも後出で、一つには端的に吉田本を参照し、その二系を一つに纏めたと見る事が出来よう。或は諸道略本と吉田本に直接交渉はなく、別個に職定流を取り入れたと見る事も出来るが、吉田本は複数系図を利用してゐる事が分かる。

以上からすると、吉田本は独自記事があるが、誤りもあり、前掲の近澄脇書の「或本」の注記からしても、複数の清原氏系図や資料を利用し、編集する傾向を指摘出来るだらう。

五、吉田本と壬生乙本

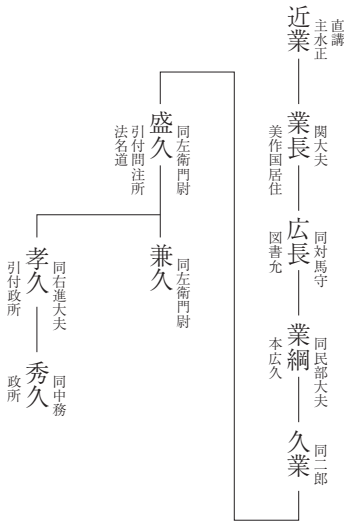
最大の問題は乙本との関係であるが、武則流以外にも壬生乙本と吉田本に共通する部分がある。壬生乙本の構成は

Aがなく、Bが御原王より夏野に至り、cの海雄をその子とするから、吉田本と大きく異なる訳である。更に海雄の孫の業恒よりbの広澄流に至り、別に業恒弟の深養父より、c-1の春光流、2、重文流(①、出羽清原氏・②、公清流)に続き、これが吉田本に近い事は前掲の通りである。

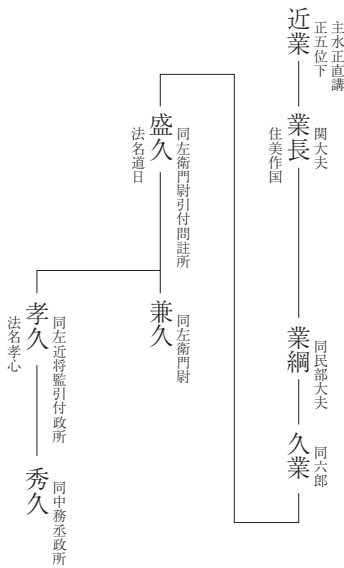
しかしbは一の定隆流(1、定俊流、2、浄明流)に分かれ、2がI i、長定流(单系)・ii、満定流が続くが、満定は能資子孫に繋がれるから、吉田本の接続と異なる。次いでb-Iの頼業の弟にII、祐安流を釣る。b-1は、I、近業流、II、仲隆流(i、仲宣流(①、隆尚流、②、隆重流、③、隆宣流、④、良種流)、ii、教隆流(①、有隆流、②、季隆流、③、直隆流、④、俊隆流【1、教氏流、2、熙隆流、3、行隆流】)、III、良業流(より宣賢まで)、IV、忠業流より成る。

両系図が載せる近業流の関氏系譜を比較するに(壬生丙本には近業子として業長は見えない)、

(吉田本)



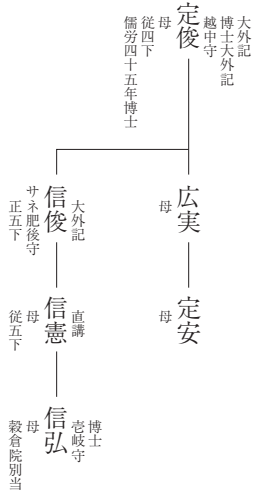
(壬生乙本)



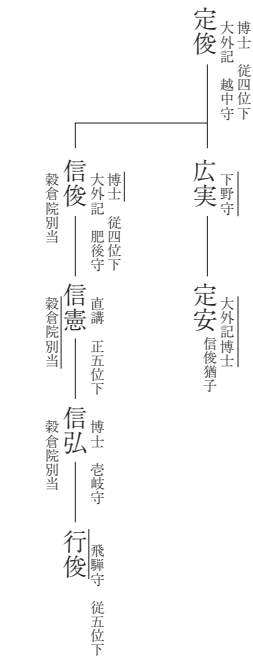
とあり、盛久の法名一字の脱落、孝久の通称「右進大夫」からすると、吉田本本文の後出点を指摘出来る。更に壬生乙本の舟橋家の最終当主が宣賢であり、吉田本の武則脇書の「異本」注記が壬生乙本に一致する事からすると、吉田本が壬生乙本を利用し、増補した事になるだろうか。

その可能性を完全に否定出来ないのだが、両系図に人物・脇書の出入りがあり、各部の接続・人物・脇書を見ても単純に一方から他方を加減したと判断できない。一例として定俊流を見るに、

(吉田本) (諸道略本同)



(壬生乙本)

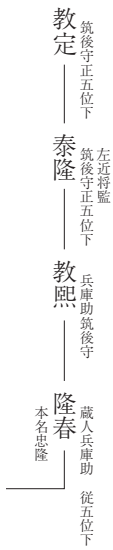


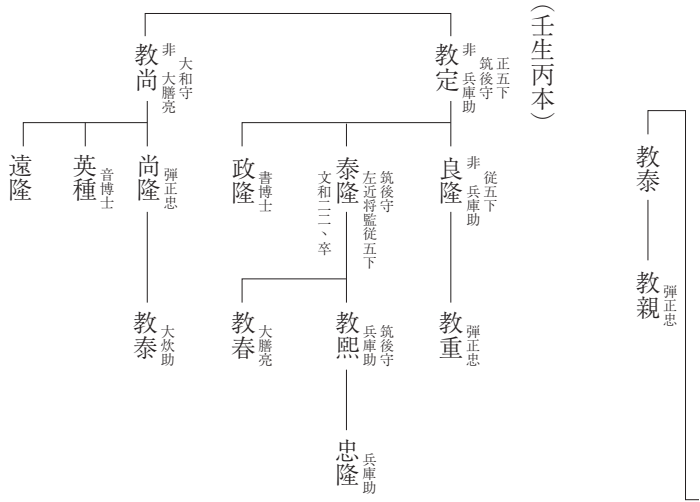
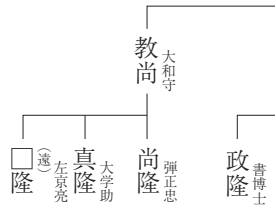
も同様で、他本に比して両本は一致が多いが、壬生乙本を利用したと解するならば、傍線部は吉田本が省略したと説明する事になる¹³⁾。これはあり得ない事では無い。しかし教隆流の季隆子を見るに、

(吉田本)



(壬生乙本)





と、丙本も含めて繁簡区々で、人物・協書が一致しない（甲本は乙本に増補か）。これでは残念ながら吉田本と壬生乙本の前後を判断するのは困難である。

故に問題を武則流に限って考察するが、（壬生乙本の持つ武則協書本文を吉田本が「異本」と表記する事を見るに、

壬生乙本とは異なる系図を元としたと解する事も可能であるから、仮に壬生乙本の如き略系図に記事を増補したのが吉田本であるとすると、貞衡流や成衡脇書を持つ別な史料、系図が存在した事に成る。その場合、貞衡流の記載人物が近い事から判断すると、端的に中条本に近い別系図を利用した事になるのではないか。また吉田本・壬生乙本の武則流系図は武則子に公清流を接いでゐる点、中条本と異なるが、公清が「新清太」で、兄弟に「荒河太郎武貞」¹⁴⁾と、「太郎」が並び立つのは通例ではない。公清流の人物は未確認で、成立不明であるが、公清流を武則流に増補したもので、それを欠く武則流系図がその前に存在したと解する事が出来る。史実とは認められない、清原深養父流との接統の問題がどの段階の作為かは別として、何れにしろ、両系図に先立ち、より中条本に近い武則流系図が存在した事は推測出来るだらう。¹⁵⁾

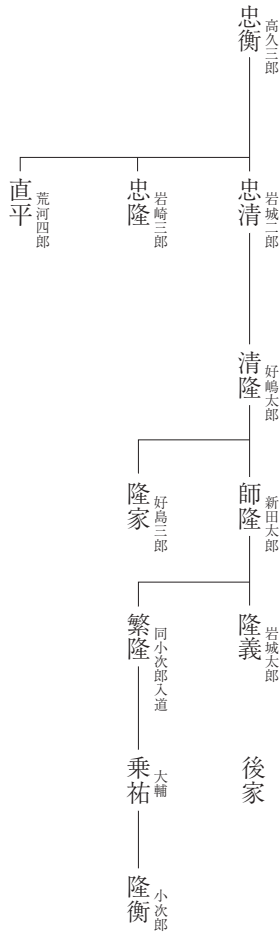
六、近世写岩城氏系図諸本

次には吉田本と中条本の武則流系図を比較する必要があるが、一方が他本の引き写しでない事は貞衡の仮名、成衡実父、清衡実父の脇書よりも明らかである。さうして吉田本の武衡の仮名「將軍三郎」、家衡の位置が正しい事、且つ後者の仮名や実父を「清経」と誤る所を見るに、中条本・『後三年合戦記』をも参照してゐない事が分かる。武則流を安忠子孫としない事は勿論、家衡・貞衡の位置も歴史的に妥当であるから、武則以前の清原氏との関係は不正確としても、海道平氏の出自とする中条本とは別に、吉田本の武則流の史料的价值を論ずる事が可能になるはずである。鎮守府將軍の注記が無い為、延久蝦夷合戦の当事者の究明には残念ながら役立たないが、吉田本は出羽清原氏と海道・岩城氏との関係を改めて示唆する事になる。

吉田本の成衡実父の諱は、肝腎の一字が虫損であるが、残画がある。偏の草字は「レ」で、これは三水偏か言偏と

推定され、傍の上部の残画は「文」であるから、虫損部は「済」の字で、「貞済」が実父の諱であつたと推定出来る。この諱の訓「ナリ」から貞成と同一人になり、成衡実父を岩城貞衡とする野口氏の前述の見解には慎重に成らざるを得ないが、伝存の岩城氏系図との関係が注目されよう。既に佐々木慶市氏の指摘があるが¹⁷⁾、南北朝初期に一族の相論文書の目安として作成された『国魂文書』『岩城国魂系図』¹⁸⁾が、古文書に見える人物との一致が多く、最も信頼されると評価されてゐる。

『国魂文書』『岩城国魂系図』（元の形態を残さず略記）



この内、清隆親子が文治五年（一一八九）の奥入の頃の人物であることから、忠衡は十二世紀初め頃の人物と推定されてゐる。¹⁹⁾更に野口実氏は中条本に、千葉常重の母として見える「海鳥三郎大夫忠平女」も、傍線が「海道」の誤りとすれば、系図の高久三郎忠衡と同一人であるとした。²⁰⁾『岩城国魂系図』では、忠衡以前が無い為、海道・岩城氏との関係が不明であるが、既に佐々木氏論が紹介する様に、近世作成の系図には、²¹⁾ 貞衡・忠衡・海道成衡を先祖、族人とするものがある。佐々木氏論で紹介される以外に、管見に入つた岩城氏系図として、

イ、『寛永諸家系図伝』『岩城』 嫡子のみ釣る嫡子系図。最終記事は宣隆の寛永十一年二月の記事で、最終当主は重隆

〔脇書は「庄次郎」〕。続群書類従完成会の仮名本の翻刻による。

口、竜門寺蔵『岩城之系図』 最終当主は重隆（脇書は「同庄次郎」）、以下、竜門寺甲本と略。²³

ハ、同右蔵系図 最終当主は隆光で、「于時寛文次壬寅年六月吉日／前総持竜門十七世兆山全京叟謹求之／寛政癸丑年迄百三十二年也／大檀公岩城様ヨリ御尋之^(ツマ)像有之故年数等相改」とある。猶、『岩城家略記』の歴代と一致（東大史料編纂所蔵謄写本による）。以下、竜門寺乙本と略。

ニ、呆犬斎文庫蔵『平姓岩城白土系』 一卷 近世後期写、後掲の白土隆衡より下部に系線が引かれ、大名家の最終当主重隆（脇書「岩城庄次郎」）の左で、持ち上がるが、掲載人物なく系図の記載が終はり、「白土系」の掲載が無い事になる。以下、呆犬斎本と略。

ホ、『水谷家譜』 同家は結城家家臣より大名、改易後は旗本となつた家。最終掲載人物は近世中期の勝弥まで。東大史料編纂所蔵謄写本によるが、『結城市史 第一巻 古代中世史料編』に勝隆まで掲載。以下、『水谷』と略。

ヘ、『佐藤家文書』五二「岩城之系図」 秋田県公文書館蔵（貴二八一）折本一冊。近世後期写か。最終当主は重隆（脇書は「同庄次郎」）。以下、佐藤本と略。

ト、『羽後亀田岩城家譜』 明治六年岩城隆彰差出一冊。東大史料編纂所蔵謄写本による。

チ、『佐藤家文書』五二「平氏岩城之一家田中之系図」 秋田県公文書館蔵（貴二八一五二）折本一冊。近世後期写。以下、田中系図と略。

リ、『平姓岩城氏系略』 秋田県公文書館佐竹文庫（宗家）蔵一枚。近世後期写、最終当主貞隆（脇書「忠次郎」・「雲山宗竜」）。「大和田信胤書之」とある。

又、『岩城代々之系図』 秋田県公文書館蔵佐竹文庫（宗家）蔵『雜記』所収による。『佐竹家旧記』五、秋田県公文書館佐竹文庫蔵『佐藤半蔵覚書』（AS二八八―六九―一）にも所収。以下、『代々』と略。

ル、『伊達族譜』 東大史料編纂所の謄写本による。以下、『族譜』と略。

ヲ、小泉大作氏藏系図 平市教育委員会編『概説平市史』第六章第二節「岩城氏系図抜粹」所収。書誌についての記載が無く、同系図より抜粹したとある。最終当主は重隆で、「庄次郎従五位下伊予守法峯月峯」の脇書あり。以下、小泉本と略。

ワ、『平姓系図（岩城之家譜）』 秋田県公文書館蔵、文化十二年菅野庄兵衛差出一冊。

カ、岩城基規氏藏『岩城系図』 東大史料編纂所の謄写本による。DⅢ『磐城之系図』に近い。但し成衡の子に「隆祐（標葉太郎）・隆衡（岩崎次郎）・隆久（岩崎三郎）・隆義（標葉四郎）・隆行（行方五郎）」の五男子を釣る。以下、岩屋堂本と略。

ヨ、「平姓泉田氏類代系譜」 電網競売に出た近世写の系図一卷。その折公開された部分的画像によれば、成衡より掲出し、その脇書に「上総守繁盛七代忠衡嫡子」・「永暦元年二月廿五日卒、五十一歳」とある点、成衡五男子を釣る点は、岩屋堂本と同じ。泉田本と略。

タ、『諸系譜』巻三十一、国会図書館蔵。繁盛流系図の中に、岩城氏はほぼ直系で、清隆まで釣る。則道兄弟として貞則（常陸介）を釣るのが独自（電子公開）。

があるが、何れも近世の写しで、佐々木氏論が指摘する白土氏より出た戦国大名岩城氏の系図である。

以上の近世岩城氏系図は、泰貞より忠衡を兄弟とする、X、兄弟本と、それを、

安忠 — 則道 — 泰貞 — 貞衡 — 繁衡 — 忠衡 — 成衡

と親子関係とする、Y、直系本に分ける事が可能であると思はれる。X、兄弟本として、

B I 『岩城系図并雜記』の権之介本・B II 『岩城伊達葦名』（御前本・鶴沼本）・口の竜門寺甲本、二の呆犬齋本、ホの『水谷』（但し貞衡・忠衡を欠く）、チの田中系図

があり、イの寛永本・への佐藤本・トの『羽後亀田岩城家譜』・リの『平姓岩城氏系略』・タ『諸系譜』も兄弟本に含まれる。対してY、直系本は、

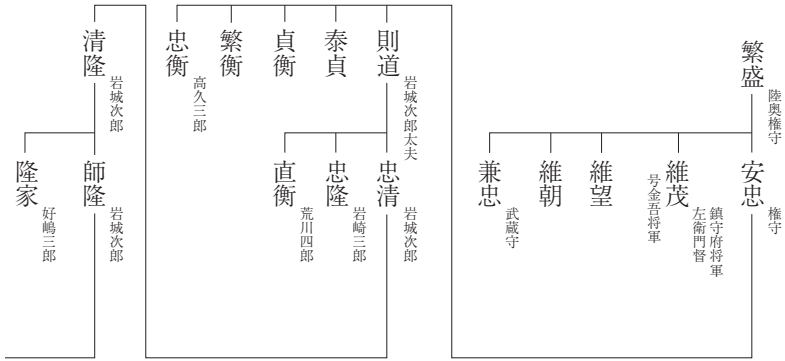
D I 『藩翰譜系図』、D II 『仁科岩城系図』・ヌの『代々』・ルの『伊達族譜』、ヲの小泉本、及びその崩れたD III 『磐城之系図』・ワの『平姓系図〔岩城之家譜〕』・カの岩屋堂本、及びヨの泉田本が属する。

勿論、Yの直系本では世代が多すぎ、ここでは成衡を忠衡子とするが、「国魂」にその旨見えない事が不審である。対してXの兄弟本も則道の子に忠清を継ぐ点、時代的に合致しないのだが、B II 『岩城伊達葦名』の御前本は、岩城家より出た本と解され、『岩城伊達葦名』と同系の竜門寺甲本の識語にも、「此者先年天下占(マ)從岩城但馬守殿御書上被成候通也」とあり、イの寛永諸家系図の呈譜であると解される。但しイでは、泰貞から成衡を欠く等、傍系人物を欠き、

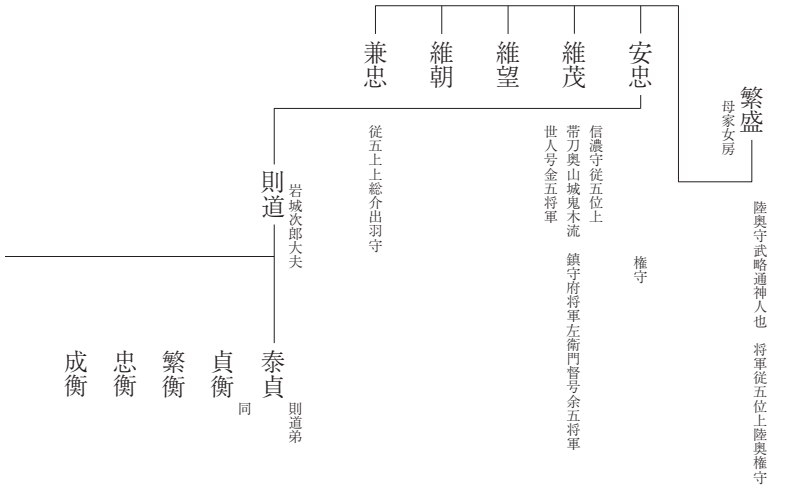
繁盛——安忠——則道——忠清——清隆——師隆——隆行——隆平——隆守
陸奥権守 権守 岩城次郎 次郎 次郎 太郎 次郎 次郎 次郎
則道代に至て岩城氏を称号とす

とあるが、歴代はXの兄弟本に同じである。これは呈譜の時点で、省略されたと見るべきか。以上からすると、岩城家のもとで編纂された兄弟本が先出であるとの仮説が考へられる。Xの内、B I 『岩城系図并雜記』権之介本は、則道を隆道、忠清（「国魂」）を隆清と岩城家の通字「隆」に統一する点、後出であると思はれ、『岩城伊達葦名』の御前本・竜門寺甲本・呆犬齋本が近く、「国魂」との関係から見ると、御前本が近い。

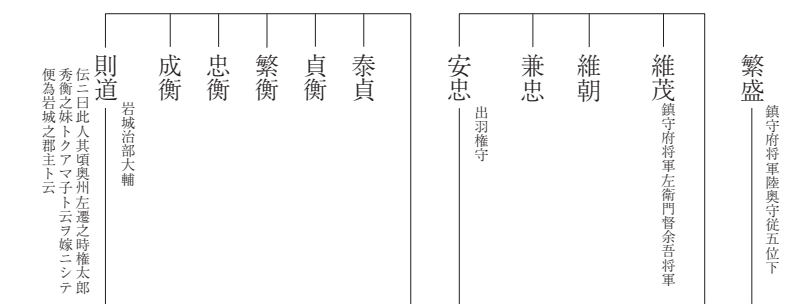
(御前本)

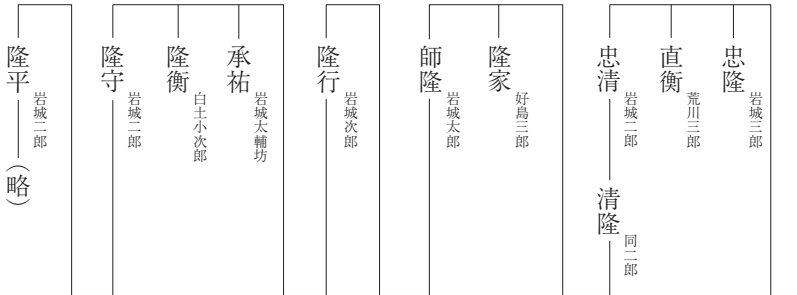
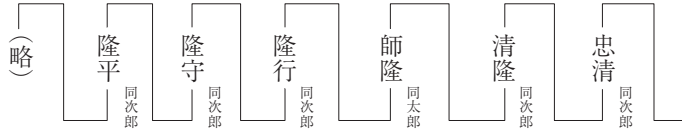
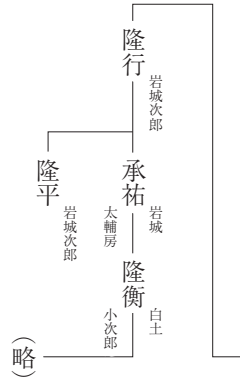


(竜門寺甲本)



(呆犬齋本)



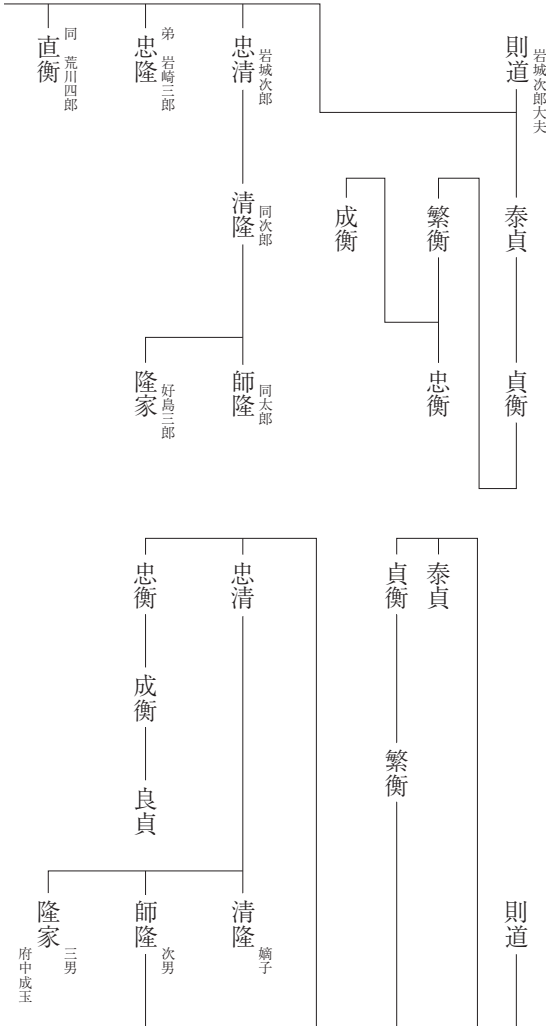


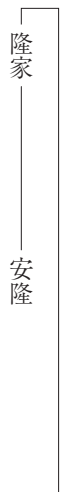
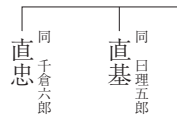
とあり、御前本は「国魂」の忠衡の脇書「高久三郎」を有するが、呆犬齋本及び『水谷』が持つ「国魂」の承祐を持たない。竜門寺甲本は、他の二本及び『水谷』と異なり、「国魂」の忠隆・直隆を持たない。これからすると、より「国魂」に近い兄弟系本の祖本が想定される。²⁴⁾

その考察の際、Xに属するとしたチの佐藤本が参考になる。同本は兄弟本諸本と人物・脇書は基本同じであるが、

チ（佐藤本）

D III『磐城之系図』





と、忠衡と成衡を兄弟とするが、世代的には、より妥当である。又直基・直忠を持つ点が直系本・兄弟本と異なる。その名字の千倉は行方郡千倉庄で、元久二年の当時、好嶋庄の一部地頭として、岩城氏の「入道殿（清隆）」・「新田大郎（師隆）」・「好嶋三郎」と並んで「千倉三郎」が見える⁵⁵⁾。巨理は宮城県南部の巨理郡で、藤原清衡父の経清の名字とする史料⁵⁶⁾のある事が注目されるが、本系図の出所は未調で、成立は不明である。

またDⅢ『磐城之系図』では、泰貞・貞衡を兄弟とし、貞衡に繁衡以下を繋ぎ、忠清は忠衡の兄弟とする。兄弟本の口の竜門寺甲本でも、則道の弟との記載があるのは泰貞と貞衡で、貞衡以下は系線が記されない。この泰貞以下の関係の相違の意味する所を推定するに、Xの兄弟本を遡り、Yを派生し得る系図は、（少なくとも共）、泰貞以下が系線で結ばれない代々書の構成を有して居たもので、その為、系図化する際、混乱、または自由な歴代解釈を生じたものではないか。更にそこでは、忠衡と忠清が並ぶ訳だが、それが本来接続するとしたならば、「国魂」そのものを利用してゐたかは措くとして、貞衡・成衡をも含む中世岩城氏系図が存在してゐた事にならう。

七、近世岩城氏系図と武則流系図

それと吉田本・中条本に共通する武則流系図との関係は予測できず、何よりその中世岩城氏系図の出現を待つべき

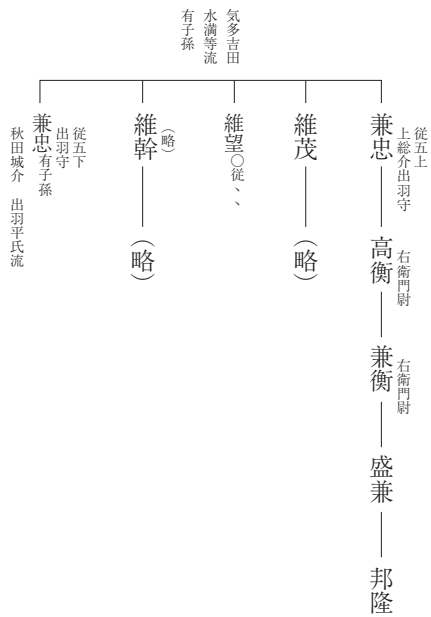
岩城次郎
 忠清 — 清隆太郎 — 師隆又太郎 — 隆義小太郎

とあり、⁹⁰⁾貞衡と貞成が同一人物となる。吉田本では兩人は別人の如くであるが、別に貞成の存在を伝える系図、史料が存在した事になるのではないか。

おはりに―出羽平氏のこと

清原一族を排して海道成衡を後継者、多氣致幹孫女をその室に迎へた貞衡の意志こそ、後三年の役の歴史的背景となる政治的課題であり、⁹¹⁾出羽清原氏と海道氏が縁戚に至る関係についても、辺境支配を担ふ事になつた鎮守府將軍・秋田城介等を含む国司系、或は貴種の土着武士⁹²⁾と清原氏が提携したとするのが歴史的な位置付けにならう。しかし安忠の名字「菊多」からすると、「海道」は一部、異論もあるが⁹³⁾、福島県浜通りを指すとして良いが、出羽清原氏は前九年の役後、東北最南に土着した海道氏と重縁を結んだ事になる。その機縁は説明可能であらうか。大石直正氏は安倍頼良婿の藤原経清・平永衡がそれぞれ、宮城南部の巨理・伊具に土着した経緯について、既に安倍氏の勢威が及んでゐた事を、両地内住の安倍氏の存在から推定してゐる。⁹⁴⁾樋口知志氏は、河内源氏の東北伸張を阻止する貞衡の政治的意図が、南東北の海道氏、更には常陸平氏の多氣氏との縁戚の背景にあるとする。

結局、此処でも史料の絶対的な不足が解明を妨げるのだが、吉田本以外に、今一点、当時の東北の歴史情勢の理解に、問題を投げかける系図がある。前掲の菊亭本『尊卑』は、新訂増補国史大系の脇坂本と基本的に一致し、繁盛流は順に兼忠流・維茂流・維幹流を挙げる点で、脇坂本他と同じであるが一部異なる記載があるが、字を小さくして、



と、維望・兼忠を挙げる（摘記）。前者は維茂と同人、後者は重複で、端的に別系図からの増補と見なされるが（維幹子孫の注記は『尊卑脱漏』に同じ）、前掲の岩城氏系図（御前本・竜門寺甲本・佐藤本）に掲載される事が注目される。更にその子孫が「出羽平氏流」であつたとする記事が問題である。史実からすれば維茂は兼忠の実子で³⁵、その子孫に秋田城介に任じられた繁成が居て（『前九年合戦記』）、遠藤巖氏はその子孫の嫡流は秋田城の在庁になつたと推定してゐる³⁶。繁成以降の出羽住の痕跡は筆者には確認出来ないが、「出羽平氏流」も、野口氏がその子貞成を海道氏の同名の人物に充てる様に、実態的に維茂流を指す可能性は否定できない³⁷。更に安忠流を「出羽平氏流」に含め得るか、また海道土着の経緯も立証出来てゐない。その実態を探るべく、今後とも中世系図を探索する事は無意味ではないだらう。

注

(1)小倉憲司氏「『本朝皇胤紹運録』写本の基礎的研究」(『国立歴史民俗博物館研究報告』一六三、平成二十三年三月)の分類に依れば一類本が古く、二類・三類本と増補される。管見に入つたのは(紙焼写真または電子公開は傍線)、

第一類 A 東山御文庫藏後西天皇宸筆本(勅封四一―一三)

同藏靈元天皇書継本(勅封四一―一三七)

東大史料編纂所藏徳大寺家旧蔵本(九一四二―二)

書陵部藏和学講談所藏大覚寺門主家本の転写本(二七二―六九)

書陵部藏実相院本の転写本(四五八―七)

書陵部藏葉室家旧蔵本(葉二〇〇〇)

B 内閣文庫藏伝飛鳥井雅庸筆本(特六〇―一四)

国会図書館蔵多田賢意写本(八五〇―一三二)

東大史料編纂所藏徳大寺家旧蔵本(四七一―一八)

内閣文庫蔵本(一四四―六〇)

C 京都大学附属図書館蔵平松本(二門ホ一)

書陵部蔵谷森善臣旧蔵花山院家厚写本(谷一三三)

鹿児島大学蔵玉里文庫本(地五―二〇七九)

書陵部蔵谷森善臣旧蔵西洞院家旧蔵本(谷三三〇)

天理図書館吉田文庫蔵兼右筆本(吉二一―一三六)

同蔵兼雄補写本(吉二一―一三七)

書陵部蔵吹上大本(四五八―八)

国立歴史民俗博物館蔵高松宮本(H―六〇〇―八一)

書陵部蔵壬生本(F―一〇―七五)

東大史料編纂所蔵徳大寺家旧蔵本(九一四二―二)

国立歴史民俗博物館田中教忠蔵、花山院家旧蔵本(H―七四三―一六五)

後西宸筆本と略。

靈元書継本と略。

徳大寺甲本と略。

大覚寺転写本と略。

実相院転写本と略。

葉室本と略

伝雅庸本と略

多田本と略

徳大寺乙本と略

集成本と略。

平松本と略。

家厚本と略。

玉里本と略

西洞院本と略。

兼右本と略。

兼雄本と略。

吹上大本と略。

高松宮本と略。

壬生本と略。

徳大寺丙本と略。

花山院本と略。

国立歴史民俗博物館蔵田中教忠蔵、玉松操旧蔵本（H一七四三一—二三四）

玉松本と略。

書陵部蔵谷森善臣旧蔵『帝皇系図』（谷三二一）

帝皇本と略

書陵部蔵吹上小本（二七〇—一九四）

吹上小本と略。

第三類 書陵部蔵文明十六年甘露寺親長写本（五〇九—一〇六）

親長本と略。

また二類本に近い京都大学附属図書館菊亭本『帝王系図』（菊テ一）、また国立歴史民俗博物館蔵『帝王系図』（紙焼写真）、尊経閣文庫蔵『帝皇系図』、前田本『帝王系図』（書陵部蔵写本による。続群書類従『皇胤系図』が同）を参照した。一類本の後西宸筆本は（略記）、

舍人親王——淡路廢帝——女子

御原王

と簡潔である（『一代要記』も同。東山御文庫本の紙焼写真による）。寛文十三年板本（内閣文庫蔵）も近い。

(2) 親長本の増補部は、二類本の他本に見える。（）は他本より補。

(3) 『日本三代実録』貞観十六年四月二十四日条（新訂増補国史大系による。以下、『三代実録』と略）。

(4) 『三代実録』貞観五年正月十一日条。

(5) 東大史料編纂所蔵。後小松天皇在位の応永十二年から十九年の間に書写（厚谷和雄氏「口絵 解説」『日本歴史』五二七、平成四年四月）。

(6) 紙焼写真による。新訂増補国史大系『尊卑分脈』に収載される脇坂本（一）部を補、書陵部蔵『菅原氏系図』（菅原・大江・高階・小野・文屋・壬生・凡河内・佐伯・春道・大伴・都・坂上氏系図所収）とほぼ同。

(7) 呆大斎文庫蔵近世中期写一卷。外題がないため、仮に命名した。系図当該部は後掲の「古後系図」に同じ。

(8) 『西国武士団関係史料集』二十八所収の影印による。森米男氏蔵『森文書』「森系図」（『西国武士団関係史料集』三所収の影印による）、「諸家系図纂」『笠氏系図』・「清原姓長野氏系図」（『碩田叢史』「豊後諸氏系図」）、「大分県郷土史料集成 上」・「諸氏家牒」『豊後清原氏系図』（東大史料編纂所蔵謄写本）同。対して深養父流で正高を元輔子とする系図が森恵一氏蔵『森文書』

「森系図」（『西国武士団関係史料集』三）・「豊後清原氏系図」（続群書類従）。

(9) 仁徳天皇弟惟道皇子の出とする点異なる。冷泉家時雨亭叢書八〇『歌入伝 三代集注 伊勢物語注』所収。

(10) 島原市立図書館松平文庫蔵『古今顕名抄』下の影印による(電子公開)。「作者部類」も豊前介房則男とする(書陵部蔵近世写三冊本(請求記号一五四 一一八)による)。上覚の『和歌色葉』では「内匠頭清原深養父」とし、「備後守道雄曾孫」とある(古辞書叢刊の静嘉堂文庫本)。また京都大学附属図書館清家文庫蔵『拾芥抄』上「又歌人三十六人」の「清原深養父」の書入れに「豊前雑色備後守道雄曾孫」とあり、別筆の書入れに「不見先祖最不審、豈非天武天皇七代後裔房則子乎」とある(電子公開)。

(11) 岑成は『三代実録』貞観三年二月二十九日条、長谷は『公卿補任』天長八年同人条参照。

(12) 貞枝は『親基日記』文明十七年八月五日条に「清八郎左衛門尉貞枝」と見え(史料大成)、翌年没(『東寺百合文書』「廿一口方評定引付」)。貞春は『親基日記』永正五年十月二十九日条に「修理亮清原貞春」と見える人物。『諸道略本』の総昌は京大大学図書館蔵平松文庫本『清原家系図』の宣賢子に、「武家奉公名字不分明」とある人物か(電子公開)。

(13) 信俊と信憲の穀倉院別当補任は、前者が『中右記』長承二年五月三日条(大日本古記録)、後者が『重憲記』・『本朝世紀』天養元年十月五日条より確認(『重憲記』は電子公開、『本朝世紀』は新訂増補国史大系による)。

(14) 『奥州後三年記』(群書類従)・『吾妻鏡』文治五年九月二十三日条。但し『陸奥話記』では吉彦秀武が称す。

(15) 同じ武則流で壬生乙本より記事が多いのが『諸家系図纂』の別本四と五で、家衡を釣るが位置・脇書が吉田本・中条本と一致しない。また貞衡流がないから野中氏が指摘する通り、壬生乙本に増補した系図であらう。

(16) 黒川本『色葉字類抄』(風聞書房刊の影印)・『二中歴』第九「名字歴」(尊経閣善本影印集成)・菅原為長撰『姓名録抄』(続群書類従)・松平文庫本『姓名録抄』(電子国会)・仁和寺本『古系図集』(俗名融通)(書陵部蔵谷森本による)・『拾芥抄』(大東急文庫善本叢刊)・吉田文庫蔵『俗名乗集』・長享本銘尽(国会図書館の新写本による)・天文七年写『実名字』(六地藏寺善本叢刊 中世国語史料) 参照。

(17) 『東北の中世武士団』I第一章「関東御領陸奥国好嶋庄」・第二章「岩城氏惣領の系譜」(平成元年十月、初出はそれぞれ昭和四十五年、同四十六年)。以下、佐々木氏論とする。

(18) 『いわき市史 第八巻 原始・古代・中世資料』の翻刻。大石直正氏『奥州藤原氏の時代』Ⅲ「治承・寿永内乱期南奥の政治的情勢」(平成十三年二月、初出昭和五十五年六月)に写真あり。以下、「国魂」とする。

(19) 『飯野八幡宮文書』一七四「飯野八幡宮縁起注進状案」(史料纂集)

(20) (18)の大石直正氏論。

(21) 本稿(上)の注(2)の野口実氏論。

(22) そこでは、B I 『岩城系図并雜記』、B II 『岩城伊達輩名系図写』、C I 『岩城系図』(統群書類従百三十九)、C II 『平氏繁盛流岩城』(『寛政重修家譜』卷五百十二)、D I 『岩城系図』(藩翰譜)、D II 『仁科岩城系図』(吉田東伍氏『大日本地名辞書』)、D III 『磐城系図』(統群書類従百三十九)、D IV 『岩城系図』(亀田町役場『亀田郷土史』上(昭和八年十二月)、何に拠つたか不明)が利用されてゐる。本稿ではB I、B IIは秋田県公文書館蔵佐竹文庫(宗家)蔵本を利用したが、両本共、二種の岩城系図より成る。前者は「岩城代々之系図」(奥に「持主近江守二受与」「下山田近江守子息大膳依為眼前書写畢」とある)と「岩城系図」(最後が重隆子の権之介(景隆)であるから、権之介本と略)、『佐竹家旧記』(『東大史料編纂所蔵謄写本』・秋田県公文書館蔵佐竹文庫蔵)、『藤半蔵覚書』(AS二八八―八九―四)にも所収、後者は「御前ヨリ出ル系図写」と朱書する系図(御前本と略)及び「鶴沼金兵衛某伝来書写写之」と朱書のある系図である(最後の当主は「秀隆采女」・鶴沼本と略)。佐々木氏論は前者では権之介本に拠るが、後者では、掲載部が省略であるから明確ではない。またC I 『岩城系図』(イの『寛永諸家系図伝』にはほ同)・D II 『仁科岩城系図』・D III 『磐城系図』については、本稿では「諸家系図纂」十四所収の、それら『岩城』・『仁科岩城系図』・『磐城之系図』による(内閣文庫本の電子公開)。D I 『岩城系図』(藩翰譜)は、『新井白石全集』第一巻の『藩翰譜系図』巻三所収による。

(23) 諸根樟一氏解題『岩城誌料叢書』の翻刻による。此処では平読書クラブの復刊本『岩城誌料叢書 全冊』(竜門寺蔵 岩城之系譜(二部))(昭和六十二年)による。

(24) 「国魂」では師隆の仮名は「岩城太郎」であるが、呆犬齋本及び『水谷』が「太郎」とし、他の二本は「次郎」である。

(25) 『飯野八幡宮文書』一七五「八幡宮好嶋莊田地目録注進伏案」

(26) 『後三年合戦記』古活字本『源平盛衰記』卷二十七「頼朝追討序宣」(勉誠社の影印)

(27) 板本「編纂本朝尊卑分脈図脱漏」には安忠自体を釣らない(国会図書館の電子公開)。

(28) 東大史料編纂所蔵の謄写本。当該部は拙稿『源平闘諍録』近似坂東平氏系図史料補遺(『米沢国語国文』三十八、平成二十一年十一月)に翻刻した。

(29) D II 『仁科岩城系図』では、貞衡の脇書に「一作貞成」、ルの『伊達族譜』五所収系図では「又名八貞成」とする。『千葉大系図』(『房総叢書』)は貞衡までだが、歴代は「代々」に近い。

(30) 本稿(上)の注(11)の入間田氏論。

(31) 遠藤巖氏「『北の押え』の系譜」(『アジアの中の日本史』二(平成四年七月)・斎藤利男氏「軍事貴族・武家と辺境社会」(『日本歴史』四二七、平成十年三月)・義江彰夫氏「王朝国家と武士の成長―神仏信仰との関わりから」(『十和田湖が語る古代北奥の謎』(平成十八年七月)所収)

(32) 大石直正氏「奥州藤原氏の時代」IV―「奥州藤原氏研究と柳之御所跡」(平成十三年二月、初出同四年)では多賀城以北を指すとす。前掲義江彰夫氏論は伊具郡隣の柴田郡の「小字名」を充てる。

(33) 『奥州藤原氏の時代』I二「藤原経清考」(平成十三年二月)

(34) 『前九年・後三年合戦と奥州藤原氏』第三部第三章「藤原清衡論」(平成二十三年三月、初出同二十年)

(35) 『今昔物語集』巻二十五「平維茂罰藤原諸任語」

(36) 「秋田城介の復活」(高橋富雄氏編『東北古代史の研究』所収、昭和六十一年十月)

(37) 両氏の関係として挙げられる『吾妻鏡』には、養和元年(一一八一)死亡した越後城氏の資長の母を清原武衡の女とするが、その女性を武衡死没翌年の寛治二年(一一八八)の誕生としても、年代的に厳しい。拙稿では「將軍三郎」を別人かと推定した(「城資長と『平家物語』「嗚声」」(『山形県立米沢女子短期大学紀要』三十六、平成十三年十二月)。

(補記) 前稿では迂闊にも逸したが、京都大学菊亭文庫蔵『系図略』所収の「清原氏系図」(紙焼写真)は、諸道略本の定隆流を略し、一部、深養父流の系譜を改めた系図である。同系統に天理大学図書館蔵『九条家本諸系譜』第三帖所収「清原」、東大史料編纂所徳大寺本『源氏系図』(紙焼写真)、前掲書陵部蔵『菅原氏系図』がある。『新板大系図』十二所収(内閣文庫本の電子公開)は舟橋家を相賢まで書き継ぐ。